

昔むかし、あるところに王さまがいました。王さまには、王子がふたりありました。

ある日のこと、王子たちは、狩りに出かけました。とちゅうで、小さな家のそばを通りかかりました。その家には娘が三人暮らしていて、こんな話をしているのが、聞こえました。

「王子さまたちは、きょうは狩りをしていらっしやるわ」と、ひとりの娘がいうと、二番目の娘が、

「あの王子さまたち、かわいそうね」といいました。「だって、上の王子さまは、結婚式のとき、気持ちがおかしくなって、ナイフで父親の王さまにおそいかかるもの。でも、下の王子さまがそのナイフをとりあげて、兄さんの腕の周りに回せば、元どおりになって、うまくいくわ」

すると、三番目の娘が、

「下の王子さまのときは、もつとひどいことになるわ。結婚式のとき、白くまが来て、連れて行かれてしまうのよ」

しばらくして、上の王子が結婚することになりました。結婚式の後、宴会が始まると、上の王子は、さっと立ち上がって、ナイフをにぎって、王さまの胸をつこうとしました。下の王子は、急いで立ち上がって、そのナイフをにぎり、上の王子の腕の周りに回しました。すると、上の王子は、何事もなかったかのようにすわりました。

それからしばらくして、下の王子が結婚することになりました。王さまは、兵士三百人に下の王子を守らせました。真夜中になると、白くまがやって来て、兵士たちにおそいかかり、ひとりだけ残してみんな殺してしまいました。夜が明けて立ち去るとき、くまはいいました。「今晚、またやってくるからな。そのときは、二倍も強いぞ」

夜になると、王さまは、兵士六百人に王子を守らせました。真夜中、白くまがやって来て、おそいかかり、生き残った兵士は、たったふたりだけでした。立ち去るとき、くまはいいました。

「今晚、またやってくるからな。そのときは、二倍も強いぞ」

そこで、王さまは、こんどは兵士千二百人に王子を守らせました。真夜中、白くまがやって来て、おそいかかり、生き残った兵士は、たった二人だけでした。立ち去るとき、くまは

いいました。

「一年間は王子を放っておいてやる。だが、一年たったらやって来て、連れて行くからな」  
下の王子は、王さまに、

「わたしのために、これ以上たくさんの人を死なせるわけにはいきません。わたしがいなくなればいいのです。わたしは、旅に出ます」といいました。

王子は、長い旅に出ました。

もうすぐ一年がたとうとするころ、王子は、小さな小屋に着きました。小屋には、娘がひとり、お手伝いの女と暮らしていました。王子は、この小屋で、ひと晩泊めてもらいました。そして、

「白くまがまもなくわたしを連れに来るでしょう」と話すと、娘は、お手伝いにいいました。

「さあ、犬のシェーンがお腹いっぱいになるように、大きな桶にたつぷりえさをやりなさい。

シェーンは、今夜、白くまと戦わなければならないのだから」

夜中になると、白くまがやってきました。白くまと犬のシェーンは、ひと晩じゅうはげしく戦いました。夜が明けると、白くまは、

「今晚、またやってくるからな。そのときは、二倍も強いぞ」といって、立ち去りました。

娘は、王子に、一本の鞭と、糸玉をくれて、いいました。

「シェーンを連れて、わたしの姉さんの所へ逃げなさい。もしとちゅうで川や湖にぶつかったら、その鞭で水を三回たたくと、足をぬらすことなく渡ることができます。それから、その糸の端を持つと、糸玉はひとりでに転がって、姉さんの小屋に案内してくれます」

王子は旅立ちました。

日が暮れる前に、王子は、二番目の娘の小屋に着きました。この娘も犬を飼っていて、犬の名前はシュタルクといいました。王子が、ひと晩泊めてもらいたいといって、白くまのことを話すと、娘は、お手伝いの女にいいました。

「さあ、犬のシェーンとシュタルクに、好きなだけえさを食べさせてやりなさい。今夜は、白くまと戦わなければならないのだから」

夜中になると、白くまがやってきました。シェーンとシュタルクは、白くまとはげしく戦いました。夜が明けると、白くまは、

「今晚、またやってくるからな。そのときは、二倍も強いぞ」といって、立ち去りました。

娘は、王子に、糸玉をくれていました。

「この糸玉は、わたしの姉さんの小屋に案内してくれます。シエーンとシユタルクを連れて、姉さんの所に行きなさい」

日が暮れる前に、王子は三番目の娘の小屋に着きました。この娘は、シユルントという犬を飼っていました。王子が、白くまのことを話すと、娘はお手伝いの女にいました。

「さあ、シエーンとシユタルクとシユルントに、うんとえさをやりなさい。今夜は、白くまと戦わなければならないのだから」

夜中になると、白くまがやって来て、三匹の犬は、白くまとはげしく戦いました。夜が明けると、白くまは、

「よし、じゃあ、一年間は放っておいてやる」といって、立ち去りました。

王子が、出かけようとすると、娘が、一本の笛をくれていました。

「あなたの命が危なくなったら、この笛を三度ふきなさい。そうすれば、どこにしようと、三匹の犬が助けにかけつけます」

王子は、笛を受け取ってお礼をいうと、三匹の犬を連れて旅に出ました。

やがて、王子は、ある国にやってきました。そして、その国の王さまの娘と結婚しました。

もうすぐ一年がたとうというある日のこと、王子の妻が、朝早く散歩に出かけました。すると、湖の向こうで、だれかがとても上手に歌を歌っているのが聞こえました。妻は、「ねえ、そこで歌っているおかた。わたしに歌を教えてください」とさげびました。すると、

「いいですよ。あなたのご主人の枕元まくらもとにかけてある鞭を取っていらっしやい。そのむちで水を三度たたけば、わたしは湖をわたってそちらへ行つて、歌を教えることができますよ」と、その声が答えました。

妻は、家にもどつて、まだ寝ている王子の枕元から、鞭を取って来ました。そして、その鞭で水を三度たたくと、白くまが、湖をわたつて来ました。白くまは、まっすぐ王子の部屋に向かいました。ところが、そこには、三匹の犬が待っていました。三匹は、とうとう白くまをころしてしまいました。

しばらくたったある日、妻が、また、朝早く散歩に出かけました。湖の岸に沿って歩いて

いると、くまの歯を見つめました。くまの歯は黄金のように輝いていました。妻は、その歯を拾い上げてふところに入れて帰りました。

妻は、くまの歯を王子に見せようと思いましたが、そして、眠っている王子の上に身をかかめて、起こそうとしたとき、うっかり手をすべらせて、王子の胸の上に歯を落としました。たちまち、王子は死んでしまいました。王子は、やはり、白くまに殺されたのです。犬たちは、妻への怒りにたけり狂いました。

王子が、墓場に運ばれると、犬たちは、こう話し合いました。

「おれたちが、ご主人のためにできることといたら、ひと晩ずつお守りすることだけだ」  
最初の夜は、シェーンが番をすることになりました。ところが、朝になって墓場から帰ってくると、シェーンは、

「おれは、起きていることができずに、眠ってしまった」といいました。そこで、こんどはシュタルクが、

「今夜は、おれが番をしよう。おれは眠らないぞ」といいました。けれども、シュタルクも、朝になって帰ってくると、

「おれも、眠ってしまった」といいました。そこで、シュレントがいいました。

「今夜は、おれが番をしよう。おれは眠らないぞ」

夜になって、時計が十二時を打った時、年とった小人がふたり、墓場にやってきました。ひとりはおちんちんを持ち、もうひとりは、びんとペンを持っていました。そして、あるお墓の所に来ると、ペンをびんにひたして、棺の上に、二、三滴たらしました。すると、棺の中の人が生き返りました。

シュレントは、その小人にいいました。

「どうか、そのペンで、わたしの主人の棺にもさわってください」

「いや、それはできない。おまえの主人は、小人の一族ではないのだから」

「ああ、どうか、せめて一滴でもいいから、落としてください」

小人たちは、行ってしまいましたが、その前に、王子の棺に、二、三滴たらしてやりました。たちまち、王子は生き返りました。王子が、シュレントといっしょに帰ってくると、ほかの二匹は大喜びしました。

犬たちは、王子に、

「ここから出て行きましょう。あなたの妻は、どうふるまおうとも、しまいにはやはりあなたをころしてしまいます。故郷に帰りましょう」といいました。そこで、王子たちは、また旅に出ました。

長いあいだ歩いて、ある大きな高い山にやってきました。そこには、大男が住んでいて、旅人を食ってやろうと待ちかまえていました。王子たちが通りかかると、大男は、山の戸を開けていいました。

「ああ、生きているうちに、おかゆを腹いっぱい食べたいものだ」

王子は、

「少しなら粉を持っているから、これで、おかゆを作るといい」といいました。

「ありがたい。だが、水がないのだ。おまえの犬をいっぴき、むこうの泉へ水いずみをくみにやっ  
てくれないか」

「いいとも。シェーン、行ってこい」

シェーンが泉に着くと、大男がこっそり追ってきて、鉄の鎖くわをつかんでうしろから投げつけました。シェーンは、しばられて、動けなくなっていました。

大男は王子に、

「もどって来ないな。別の犬をやってくれないか」といいました。

「いいとも。シユタルク、行ってこい」

大男は、また、鉄の鎖を投げました。シユタルクも、泉のそばでしばられてしまいました。

大男は、

「あいつももどって来ないな。ああ、わしは、もう、おかゆを食べることができないのか。

三番目の犬をやってくれないか」といいました。

「いいとも。シユレント、こんどはおまえが行け」

シユレントが泉に着くと、大男は、また、鉄の鎖を投げました。シユレントも、しばられて動けなくなりました。

大男は、王子に、

「犬は、三匹とも、泉のそばにしばられているんだ。今度は、おまえをころす番だ」といいました。王子は、

「ぼくは、あんたに親切にした。だから、あんたも、ぼくに親切にしなくちゃいけない。死

ぬ前に、笛を三度ふかせてくれ」といいました。

「いいとも。三度だけだぞ」

王子は、笛をふきました。一度ふくと、犬たちは、鎖を引っぱって、

「ご主人の命が危ないぞ」とさげびました。二度目にふくと、犬たちは、力いっぱい鎖を引っ張りました。三度目に笛をふくと、とうとう、犬たちは、鎖を引きちぎってとんで来ました。そして、大男をかみころしてしまいました。

山の戸の中には、たいへんな財宝さいほうがあったので、みんなで、金や銀を持てるだけ持って、また、旅を続けました。

故郷の近くまで来ると、王子は、小さな草原で泉のほとりに腰をおろしました。犬たちがいいました。

「ご主人さま、わたしたちの体を、それぞれ三つに切って、ひと切れずつ泉の水でよく洗あらい、ぴったりつけて並べて置いてください」

王子は、おどろいて、

「そんなことはできないよ。おまえたちは、ぼくに、とつても親切にしてくれた。そんな仕打ちをするなんて、ぼくにはできない」といいました。けれども、犬たちは、どうしてもやってくれといってききません。そこで、王子は、しかたなく、犬たちをいっぴきずつ三つに切り、ひと切れずつよく洗って、ぴったりつけて並べました。

王子は、ひどく悲しみながら、故郷に向かって歩いて行きました。少し歩くと、ふり返らずにいられなくなって、ふり向きました。すると、あとから、三人の王子が楽しそうに歩いてきました。それが、三匹さんびきの犬だったのです。

おしまい

村上郁再話

資料『世界の民話3 北欧』 榎田照男訳／ぎょうせい